

縄文人が暮らした家と言えば「竪穴住居(たてあなじゅうきょ)」です。

竪穴住居は地面を掘り下げて床を作り、柱を立てて 屋根をかけてつくった半地下式の建物で、床には土が 赤く変色している場所があり、住居の中で火を焚いて いたことがわかります。

時代や地域によって大きさや形に違いがあり、中に は長さが10m以上もある大きな竪穴住居跡が青森県 三内丸山(さんないまるやま)遺跡で見つかっていま す。また、屋根は「アシ」や「カヤ」などの植物を材料と したほか、「土」で屋根を作った竪穴住居跡が岩手県御 「所野(でしょの)遺跡で発見されています。

■入江貝塚の竪穴住居

入江貝塚では縄文時代前期から後期(今からおよそ 5千年前から4千年前)の竪穴住居跡が見つかってい ます。時期によって形が異なり、前期から中期は小判や 卵のような形で、後期のものは円形でした。

竪穴住居が作られた場所も遺跡の中で変わっていき ました。前期から中期にかけては遺跡の山側に多く、後 期には遺跡の海側に限られるようになります。調査の 結果、これらの住居跡は、狭いところで何回も建て替え が行われていたことがわかりました。

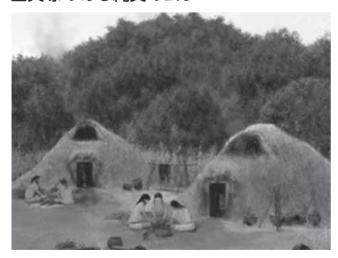
写真は縄文時代後期(約4千年前)の竪穴住居跡の 発掘調査の様子です。6 m×7 mの大きさで地面を掘

り下げていて、柱の穴の跡や石を円形に置いた中で火 を焚く「炉(ろ)」の跡が見つかっています。この住居跡 は、柱の穴の数が多いことや、火を焚いた炉の跡が3か

所見つかった ことから、同じ 場所で少なく とも3回は建 て替えられた と考えらえて います。



■貝塚のある縄文のムラ



縄文人が暮らしていたころ、入江貝塚はどのような 環境だったのでしょうか。

それは、縄文時代の土の中にある花粉の化石を調べ るとわかります。入江貝塚の縄文時代の土からはオオ イタドリやカラマツソウ、ミズナラやハンノキなどの 花粉化石が多く見つかりました。縄文時代の入江貝塚 は木々に囲まれた日当たりのよい場所だったよ うです。

入江貝塚に暮らした人々は、ムラのまわりの木を 切って、竪穴住居の柱材や火を焚くための薪(まき)な どを手に入れていたのでしょう。家を建て、ムラのまわ りに広がる海や山から食べ物を手に入れ、食べた後の 貝殻や動物の骨は貝塚に集めました。

また、ムラに住んでいる人が亡くなったときは、貝 塚にお墓をつくって埋葬しました。そうした暮らしが 入江貝塚ではおよそ千年にもわたって続けられたので す。遺跡に立つと、何千年も前に暮らした縄文のムラの 姿が浮かび上がってきます。



